

現代の教育と子ども



周 郷 博

だいたい改めてやろうなんていう教育は、家庭でもだめですよ。なんでもないみたいだけど劇的な機会、瞬間というものがあ
り、そういう時に、子どもは成長するわけですから。

メルロ・ポンティという人が、もう死んでしまった哲学者ですが、「子どもと自然との関係、子どもと他の人との関係」について述べています。最初にそばにいるのは、お母さんなんだけども、お母さんのまなざしが、まわりをみる目を作っていくことは確かですね。子どもがいちいち自分で考えていくことはいですね。まわりの人がどういふまなざしで見ているかということが大事です。それによつてもものを見る目ができていくのです。だからお母さんや、周囲にいる人のまなざしが大事なんだよね。目というのは、きわめて重要なものですよ。言っていることは

じゃないんだよ。動物だって人間の目を見ていることは、みんな知ってるでしょ。こっちの目、見えますよ。子どもは、もっとよく見えますよね。子どもをどういふふうに理解していくかというところが、子どもの心を決めていきますね。自然というものも、他の人との関係も、最初にまわりにいた人のまなざしによつて変わっていくことは確かなのです。それなしには、できないんですよ。だからそんな欲ばつたまなざしをしていたのじゃ子どもは育つていく道理はない。

二歳頃までに、まわりにいた人が、どういふ話をしていたか、どういふことばで語っていたか、どういふ行動をしたかということとで、ここにえらいことが起こっているわけ。つまり話すことができない環境にいる時でしょ。まあ、有名な話だと、フランスで生

まれてから物おきの中に入れていた子がいたね。何も、イン
ドのカマラとアマラだけじゃないよ。二歳までに、ことばとい
うものを、本当にきいていなかった、人間のまなざしを知らなかつ
た人は、これもう絶対に後だめなんだね。伸びない、そして五歳
までにまわりの人が、どういふふうな話をしているのを聞いたか
ということ、将来その人が世の中をみていく色あいとかね、世
の中にあるいろいろなことを解釈する目というものができちゃう
のね。

二歳、そしてこれが三歳になるでしょ、五歳になってほしい
ふつうなら、人間という動物がいろいろな物を見、それを解釈
し、それをことばで言いあらわすようなことは、ほとんど全部で
きるようになるでしょ。それはね、いわゆる学校や幼稚園でやっ
ている教育なんかで行なわれているのじゃないね。

メルロ・ポンティのことばで言えば、「どういふまなざしで見
ていたか」ということによつて、決定的になってきますよね。五
歳までに、自然や人間の世界をみる目のロジックね、ロジックと
いうのは、ことばのつながりといっしょにあるよね。つまり、こ
とばがそこで、どういふふうにして発生するかというチャンスに
いますから、もうあとはダメなのよね。

子どもは、お母さんのことばをそのまま自分のことばにして、

それで遊んでいるものです。今、ことばについていいましたけれど、
ことばというものと心とは、いっしょにあるのです。ことばがな
くて、心なんてないのですから。

三歳位になるとひとりで遊べるようになります。人格というも
のができてくるからだね。まわりにおんぶしちゃっていませんよ
ね。四歳位になって、イヤダということが言えるようになるの
は、自分というものができてきているからです。イヤダというこ
とによつて自分というものを確かめているのですよね。ピアジェ
の自己中心という言葉をみんなまちがえていると思ふんだよ。自
己中心というのは中心がかわっていくことです。つまり、中心が
もうひとつの高次な中心をもつということですよ。殻を破つて
もうひとつの人格になることですからね。あの自己中心というこ
とばを、みんな変な観念的なことばで解釈していますけど、そんな
ことではないのです。おとなになると、できあがった人格はなか
なか変わりませんから。よほど大衝撃を受けないとね。現代人は
大衝撃をうけた方がいいよ。時に女つていうのは衝撃をなかなか
受けないそうさ。

その階段で、去年の五月頃、子どもがあそんでいて……：「子
どもはひとり、ことばをいいながらあそんでいるものでしょ。」「い
つも、いつもお世話になってありがとうございます」ピョン。

(笑い) そのことばは、いかにもお母さんが言ってるかのようだな、お母さんそっくりなんだな、それといっしょに心を作っているのだよ。お母さんの心が、そのまま子どもの心になるわけじゃないよ。しかし、それがなければ、子どもの心はできていかれないのですよね。

この世界中のかわり目と日本というものが、この状態でいったらダメであることは明瞭でしょ。公害だけの問題じゃない。教育というものも今や、まさに公害の一種ですよ。やらない方がいいのですよ。教育という紋切り型のことをやって、子どものきげんをとって退屈させておくなんていうことは、これ、公害の一種です。精神的にはダメになります。だから、お母さんたちにも決心を持ってほしいですね。

子どもが生まれたということは、荷やつかいであるだけじゃないんだね。だんだん年とっていくお母さんたちにとって喜びであるはずだね、それは喜びであるべき責任ですよ。その責任を、この幼稚園に子どもをあずけたということで、お互いにわかちあっているというわけなのだ。人間の神経も今にだめになりますよ。こういうことで考えると、お母さんたちに参加してもらいたいのです。

参加ということばは、フランスやヨーロッパでいってる場合には、責任というものを主にして考えられているのです。権利の主張をして参加するのじゃないんだね。人類に対する仁の観念から、ここで参加してほしいんですけれどね、ここにあずけたから、お母さんは何もしなくても子どもはよく育つと思わないでほしいと思うのです。

ヘンリー・ミラーという人が書いた、「体験的教育論」というものが訳されています。ヘンリー・ミラーがかいた本を、数年前に、友人の久保貞次郎君が、ぼくにくれたのですが、その本の名前は「絵をかくということは愛しなおすということである」(「O PAINT IS TO LOVE AGAIN」)と、うもので、絵をかくということばはね、人生をもういっぺん新しい目でみるということなんだね。それは、子どもにとっても、同じことなんだな。ぼんやりみていると自分の欲にからんだものしか見ていませんよ。自分に都合の悪いものは見ていませんよ。絵をかくということは、人間らしい目をとり戻すことであります。だから生きていくこの人生を、もういっぺん愛しなおすという、愛がぶつかるといいうことですよね。

ここの子どもたちの絵はね、ちょっといきおいがないような気

がするな。形はできてるけど、愛している絵ではないね。ぼくは三歳組からはじめて絵のこともやろうと思っただけです。人間の目というのは独特なものですから。現代みたいに機械や技術が発達してくると、ぼんやりしていても生きていられるけどね。昔にさかのぼればさかのぼるほど、人間の目はもっと遠くののを見たいしね、生々としたものを見ていたはずですよ。機械や技術が発達して便利になればなるほど、目はとらわれた目になりますからね。

これは、メルロ・ポンティの「眼と精神」に出てくるのですけど、眼、つまり絵をかくということはね、絵のような美しいものとして、現実にあるものをみなおすということは、今の時代の人がよみがえるために必要なですよ。

だから、子どもの絵の教育は、絵がうまくなるなんていう、そういう簡単なもの以上だね。生命のリズムをもういっぺん生きかえらせるために必要なんだ。ぼんやりしてるから、どんどんテレビなんでもに変なふうになれちゃうのですよ。

ヘンリー・ミラーはね、中学校へ入るまでは教育なんてものについては、何も考えたことはなくて、他の少年少女と同じように、いたずらをしてはしかられていた。それが、子どもらしい生活なのですけどね。

「小学校の時代の先生の中では、三人の秀れた教師のことを今でも、あざやかにおぼえている」まずこのところがおもしろいでしょ。だいたい子どもっていうのは、いたずらをしたり、叱られたりしているものですよ。勉強ばかりしているなんて、かたわみみたいなもんですからね。どういふあそびといたずらをするか、だよ。全然いたずらをして叱られたことがないなんていう子どもはね、人間じゃないですよ。

ソビエトの最初に人工衛星にのった人だっけ、「すいかどうぼうをやらないう少年は人間じゃない」って……。ぼくらは、すいかどうぼうはしたことはなかったけど、うまくもない梅をそっとぬすみに入れて、追いかけられたりしましたね、それは、実におもしろかった。

ここでちょっと大いに考えさせられることがあるね。学校時代に三人だけ記憶に残った先生がいたんだな、今でもおぼえているんだな。幼稚園の時代にもね、何か楽しい、何かめぐりあった、この人と本当に話ができたという、つまり、ヘンリー・ミラーが言っているようなずっとあとになっても、思い出せる先生は、ひとりか二人いないとこまるね。そういう人とめぐりあえるかどうかですよ。めぐりあわせるわけにはいかない。ちょうど、男と女を集めてきて結婚しなさいと言ったってだめなのと同じなんだよ

ね。だけど、めぐりあえる状況は作れるね、これは、先生が、長い期間を通して、テストされていることだと思ふのだ。

その次にかいてあることは、現代人の問題を考えるのに役立つ。『フランスの詩人の、アルナース・ランボウという人が、我が学校、まあ幼稚園も含めてだな、『教えられたことは全て茶番にすぎない』と言っている』茶番というのは、まちがったことという意味だそう。学校で教えられたことなんていうのは、ほとんど役に立たないものです。役に立たないだけども、その中で、ふとある機会に覚えていることがあるね、それが役に立つことだね。

それで次にこう書いてあるのだが、これは幼稚園には、ぴったりにあてはまらないかも知れない。「もし私が、一生を通じてのよき友人を得る機会が恵まれなかったら、大学を途中でやめたように、ハイスクールを途中でやめてしまったかも知れない」つまり、学校へ入るということでは、どういう友だちとめぐりあうかということが非常に大事なんだね。旧制高等学校では、それに近いものがありましたよ。今や、まさに、それがなくなってきたのだよ。よく言われてるでしょ。小学校ですでにそうだけど、中学校でね、できる奴がいなくて、みんな言ってるよ。ね、つまり、友だちなんていうのはいないんだ。できる奴がい

なければ、おれの点数の方が上になるだろう、お互いに、排斥しようような精神状態にあるわけだ。

ミラーの友だちの中で、将来アメリカの大統領になるといって勉強していた人がいたんだそうだな。これはろくでもない奴になつたそう。そんなこと言っていて、りきんで勉強するなんていうのはね、自分をちょっとの間、だまして興奮するために言っているだけですからね、何か他に原因があって退屈している人間にちがいないんだ。勉強しないでよき友人だったのが二人いて、一人はハイスクールの校長になって、一人はなかなかいい判事になつたうだ。

ぼくが敗戦直後にね、東海道線にのつていたんだ、その頃の汽車の方が、新幹線より、よっぽど味わいがあったな。新幹線みたいな、ちつともおもしろくないよ。子どもにとつてもそうですよ、煙突から、けむりが出てき、ポッポッポッっていうの、いいでしょ。富士山のふもとなんか……。小さい子どもも好きなのは汽車っぽいですよ。おとなは退屈しているものだから新しがつてるけど、子どもの方は、そういう新しいもの好きじゃないよ。イギリスやドイツへいけば、汽車というものは大体あいうふうなですよ。日本のむかしの汽車っぽいですよ、だって、アウトバーンというのが発達しますからね。汽車というの

は古くさい汽車なんですよ。

話が変わるとこいったけど、東海道線にのった時、ぼくの前におやじさんがすわってたな、実に印象的だったんで、その時二つのことを考えたけど、そのひとつは、日本人の心から富士山が消えちゃったというの、日本人の心から清潔さと、そびえるような高貴なものがなくなっちゃったんだという話をしていましたね。

もうひとつそのおやじさんと話していたんだけど、小学校の頃から今までのこと考えてね、勉強ができた奴と、できなかった奴を今、何しているかで比べると、勉強できたって、できなくなつて、大してちがいないのね、勉強できた奴の方がだらしがないんですよ。ぼくはね、何だかできたかも知れないけどね、ぼくといっしょに副級長やっていた奴はね堅物でね、実に頭がかたくて、動いていないんだな、どうにも手にも手に負えなかった同級生は、十三、四になって、社会に出るとかわってきますよ。実に人がよくて、農業よくやっていますよ。今の学校っていうものを失っちゃったんだ。だからそこで、勉強ができたなんていうのはね、長い目でみたら何のことはないんですよ。

その次はね、「強制されたものは、役にたたない」ということ、これも確かだ。今の学校は、学校と社会と、時にはお母さんもいっしょになって、変なことを強制しているね。勉強させてい

ることは全然役に立たないんだ。役にたたないんですよ。人生という大学へいかなきゃならないんですよ。

ゴリーキの幼年時代、おばあちゃんが、人生というものを教えてくれるんですね。それがゴリーキという人間を育てるわけですよ。いわゆるお勉強なんてしないのです。貧乏でね。人生という学校にあたるものを、おばあちゃんが、ひきうけたんですよ。

ぼくは、今の幼稚園でも何か強制しているところがあると思うよ。だけど、ぼくが連れてきたやぎに対する態度なんて、誰にも強制されていないね。やぎが逃げてむこうの方へいっちゃったらね、ひとりの子が、よくひとりであそんでいる子なんだけどね、おっかけてって、連れてきましたよ。

それから、もら一つ、ヘンリー・ミラーのことで言いますけど「勉強を興味の無いものにするのは、教師であり教え方である」だいたい勉強を興味の無いものにしてしまうことはね、教師が悪いのだと思うんだけどね。今、やっている教育全体が、この批判にさらされていると思うんだ。教師が無感動であつては、しょうがない。教師は知ってるなんて言っても大して知りゃあしないん

だ。教師が本当に感動してよくわかったことを、その感動を通じてごくわずかなことだけでも、それを教えなきゃいけないんだね。今の日本の教育は、そういう点では、だいたい子どもたちのために悪をおかしていると思うのだ。教育なんて長い時間やる必要はないのです。パートランド・ラッセルが言った通りで、幼児期なんて特にそうですよ。ほんのちょっとした時間でいいんです。ラッセルは今年の二月、九十七歳で死んでしまいましたけど、自分で、五十歳ちよと越えた頃に幼稚園を作って自分でやってた人で、ラッセルによると、動物や植物を育てるのがうまい人の言うことを子どもはよく聞くそうだよ。頭のいいなんて顔した人の言うことは、あんまり聞かないものですからね。

ヘンリー・ミラーが頭を空っぽにすることを教えずにはいけないと、言ってるんだよね、何か知ってるというふうなふうにしてはいけないんだよね、頭がからっぽになるようにしなきゃいけないんですよ。お母さんもそうした方がいいよ、そうすりゃ、何かが入ってくるでしょ。頭や心の中にいろいろなものがつまってるでしょ、欲やなんかも含めてね。栄養もつけたもんだから太って、入りようがないんだ。(笑い)頭をからっぽにする必要がある。頭をからっぽにするということは、謙遜になるということですよ、見ないですましてしまうことで大事なことがたくさんあるん

です。いい音楽を聞いたって、ハッと気がついて、これはいい音だなと深く味わうことなしに、ききすしちやうことが多いわけだね。やっぱり謙遜である人にだけ聞こえるんですよね。

それと、終わりの方に「別の目が見ること」お釈迦さまとイエスさまとセント・フランシスをね、信仰なんていうことばで言うからいけないんだよね。お釈迦さまだって、イエスさまだって、セント・フランシスだって、今この時代に生きていたら体制に反抗する人にちがいないですよ。何か信仰というと、ただ、おがんじやって自分ばかり助かるのかと思っちゃってるけどね、そうではなくて聖フランシスという人は、村のそばに狼が来て、村人たちがこわがっていたけれども、その狼をかいならした人だよ。つまり動物と仲良くできた人です。

それは十一世紀ヨーロッパの夜明けですからね。中世からの夜明けだよ。それは、いわゆる観念的な信仰なんかで目がさめてきたんじゃないんだね、大自然とも関係がついてきたことによつて、つまり、小鳥や狼とも話ができるような状態になってヨーロッパは変わってくるわけですから。今のぼくらには、そういうものが必要でしょ、自分たちが勝手に作って、でっちあげた社会、これだけが全部であるかのように思ってたね、この不浄なものだけ見てるんじゃないかって、大自然も宇宙も含めたこの時代に、人間

が作ってしまった大気汚染、人間の欲でかためられた世界ではなく、もっと本当の世界があるはずで、それを作る必要がありますね。

子どもが三歳か、四歳か、五歳位になると、自分の世界を作つてそこに住んだよね。この世界というのが、今の状態だね、テレビやラジオやマスコミがさかんものだから、自分の世界が作れないの。つまり、まわりにある人間と自然を含めて、世界をその子の目でみて、そこにひとつの世界観ができるんですけど、

その中に住むんでしょ。ところが今、公害なんかで言われているような人間の欲でかためられた、そして機械というものであらしまわった世界があつて、その世界が現実だと思つてくれるけれど、この世界は、まちがった世界でしょ。もしイエスさまや聖フランシスやお釈迦さまが、今ここに生まれていたら、この体制に対して反対するはずですよ、反対しなかつたら、イエスさまでも何でもないはずで。だから信仰なんてものじゃないんだね。

人間が作つてゐる社会は動物や植物や大自然といつしよにあるものですよ。宇宙といつしよにあるものですよ。社会がどんだんかわつていくから、ぼくも人によって作られちゃった目もつていふよ。小さい子はまだ澄んだ目もつていふはずですよ。

その小さい子の目をどんだんくもらせていく教育をやつてはいけ

ないのです。そして、こういう社会が長もちするはずはないですよ。まさに日本は、代表的にみんなが大急ぎで歩いていきますよ。地獄へ、いっしょうけんめい歩いているようなものですよ。

ぼくらがこの何年かの間、うまいことやつたつたつたね、三十五年後には、何か、みんなふけの集まりになつたらどうするの。ぼくは本当に勉強して、本當に行動して、本當の子どもを知りたいと思います。だから、お母さんも……。

ぼくの知つてゐる例だけだね、精薄の子どもが、いい詩をかいて、十五歳で卒業して、いい職場についてみんなから、ほめられていきますよ。そのお母さんに前会つた時は、とても年とつてましたけど、子どもがよくならつたらお母さんが若くなつちやつたね。年をとればとるほど、若くなる。ことができるとすればだね、子どもがよくならつていくことでは、ぼくは美人にはなれないと思つた。いろいろな機会にお母さんたちが、ぼくと、この大事な一九七〇年以後の幼児の育て方というものを紋切り型ではなく、考えていくということで協力してもらいたいと思つています。本當の子どもをわかるということ、年とつた人にとつて、うまれかわるために必要ですよ。お母さんは永遠に若いはずですよ。

(附屬幼稚園母の会での講演の記録より)